

授業方法について独自に工夫していること 【創造科学系】

学生同士で考え方を深めていけるように、当日の授業の概略以外の時間は、話し合いの時間を多く設けた。新しい話題を多く取り入れることで、これまでの事とこれからの事を考えやすく授業を展開した。

電気Iの内容は電気磁気学であり、受講生が小学校から高校の理科の中で必ず関わってきた内容であり、常にその振り返りを利用し、受講生の理解のハードルを低くした状態で中身に入っていくようにし、その後順次深める授業としていく工夫をした。電子工学IIは、基本的な内容は座学で授業者が一方向的に話をする形をとるが、受講者の理解を深める場面では、グループ討議を行うような工夫をした。

特記すべき工夫はないが、活動内容の振り返りを促す課題を出した。

学生が主体的に授業に参加できるよう、講義の後、生涯スポーツの実践として、ニュースポーツを取り上げ、自らが将来指導者になることを想定した実践型授業を行った。

授業内容が多い部分について、効率よく伝えるためのパワーポイントを作成し、学生には同じものを印刷して配布しました。
授業内容についての理解具合を確認するため、毎回、確認テストを行いました。
実物を提示し、回覧してもらいました。

学生側の理解。

- ・高校までの経験(無意識に目にしてきた学校保健活動)→理論化(どういうしくみが取られているのか)
- ・高校生の立場では見えなかった活動→新知識。
- ・学生のこれからを支えるような、賞味期限の長い知識。

各学生が主体的かつ、自主的に学ぶことができるように、「学習課題」を毎時間設定しています。

授業内容の質問について、毎回、全受講生を対象に「大福帳」の記載で往復していますが、それでも下記(4)の結果もあります。

下記(4)の内容

授業難易度について、「難しい」とするアンケート結果が、美術平均(23.2%)を相当上回り、(53.1%)となっている。→では「易しく」すれば良いか?!という訳でもないと思っています。一方で「週当たりの学習時間3h以上」が34.4%(美術平均14%)は、大学教育として適切と考えています。

教科書を準備して活用している。また、社会的な動向に関連させながら基本的な原則の解説を行った。

学生の興味関心の度合いをみて、次の講義での内容を考える。

パワーポイントによる授業ではなく板書、また実習をとり入れたこと。

スライドや実物によるデザイン事例を示して、これまで学生の中になかった概念に気づかせるようにしている。それによって、デザインが表面的なことに終始するのではなく、多様性を持って拡大していつていることを認識してもらうようにしている。

本授業のうち約半分は、愛知県内の伝統的工芸品の産地から伝統工芸士の方々にお越し頂いて、伝統的工芸品について直接お話を伺ったり、実際に制作工程を体験させて頂いたりする内容となっている。この内容の授業を行ったのが平成24年度の「工芸論」という授業であった。平成23年度に愛知県産業労働部産業振興課から愛知県内の伝統工芸士の方々を派遣する事業に関して協力依頼があり、このような授業を開始することが出来たが、愛知県からの予算補助は1年目だけで、2年目からは本学の美術教育講座と愛知県伝統工芸士会からの予算のみでこれまで実施して来た。少しずつではあるが、本学のこの授業に協力してくれる産地も増え、内容も充実してきたところであるが、私自身が次年度より幼児教育講座に異動することもあって、本授業は次年度継続できない状況となった。

「日本美術史概論Ⅱ」と「日本美術史研究Ⅱ」は日本美術史の講義であり、独自に作成した授業資料を用意して学生に配布し、画像資料を作成して画像を示しながら説明を加えている。また、後期期間中に数度授業時間内に作成するレポートを課し、学生の理解度を測ると共に積極的な授業への参加を促した。「美術史演習Ⅳ」は4年生対象のゼミであり、毎回一人の学生が各自で設定したテーマについて発表し、発表後に他の学生と質疑応答を行う。また、授業後に発表内容についてのレポートを毎回課している。学生の発表について、事前や発表後に適宜指導している。

グループによる学習を取り入れながら授業を組み立て、学生が主体的に学べるように努めています。

造形基礎Ⅳでは布ができるまでの工程を学び、様々な材料と色を使って、イメージをふくらます。各自でファイルを作り、発表した。

(織)フェルトメイキングを学び、生き物テーマに立体造形を作った。各自で柔らかい羊毛がどの様に固めて形になるのを工夫した。最後に一人ずつ自分の作品の発表をした。
(金工)銅合金によるキーホルダー制作を通して、蝟型石膏鑄造技法の基本を学習する。細工蠟作り・原型制作・湯道付け・埋没・鑄湯・仕上げ・着色・講評と工程を1回ごとに完結させるため、授業時間の配分を工夫した。

できるだけ学生に考える習慣を付けさせる。
正解であるかどうかよりも、考えることの重要性を繰り返し伝える。
学生に緊張感を持たせるために、履修票をランダムに束ね、めくられた履修票の学生を指名する。

学生同士が学び合い、意見交換して自らの問題意識を深めることが出来るよう、また様々な考え方を受容すると同時に、自らの意見や主張、考えを明確に述べる事が出来るように授業設計を行い運営した。具体的には、毎回の授業において学習内容を実践する機会を多く設けること、学生同士で意見交換する時間をとり、中でも司会など役割分担をしてディスカッションが深まるようにすること、学生同士だけでなく教員と学生間においても意見を言いやすい環境づくりをすることを大切にしたい。

実習ですので、学生の皆さんが将来自身をもって仕事ができるように、正しい技術をしっかりと身に付けてほしいと思っています。納得がいくまで一生懸命に制作したバッグや段階標本などは、生涯の宝になるものと信じています。
そのためには、学生さんの皆さんにわかりやすくするために、段階見本や、完成見本を見てもらいながら説明したり、制作のポイントとなる部分の図や、注意点をかいて示したりすることで、難しいと思われるところも気を付けて制作できるようにしております。目標をもって意欲的に取り組んでくれることを願って、先輩の作品や意見を参考にしてもらおうようにもしております。机間指導をすることで、一人一人に寄り添ったアドバイスができると考えております。

両授業は人数多過による同授業のリポートであるので、コメントは同じ。
家庭科の衣食住の一端である衣生活に関する実験授業であるから、毎日着用している被服の素材面に注目し、被服がどのように生活環境に対して、身体の健康保持に関与しているかを実験的に学ばせ、生活の中で被服のもつ役割を体感すると同時に確認させることを目差している。日常生活では気付かない被服の身体へ及ぼす素材的性質が理解されるような観点から繊維の種類の違いにより、それから作られる布の性質がどのように異なってくるかを認識させ、被服がいかにかまう着用されているかを確認できるような実験行わせ、その発現する性質の理論的根拠を調査させるようにして、毎回実験についてのレポートを提出させ、その内容の点検により、実験内容の意味を示唆することにより、より完成したレポートを書かせるようにしているのが授業法としての工夫である。

実技中心の授業のため、通常の1対1の進め方では一人ずつに割ける時間が少なくなってしまうため、グループプレッスンという方法で行い、さらに、学生同士で学びを深め合うグループ活動に時間をかけている。特にピアノの実技は一人で勉強することが多いため、グループでの学びによって、新たな発見があることを期待している。

- ・最終回までの資料を一括してダウンロードできるようにし、学生のペースで予習が可能なようにした。
- ・授業で扱う作品の図版を張り付けたノートを用意し、講義内容の記録に便宜を図っている。

できるだけ、学生が自分から学ぶ姿勢が取れるよう、課題等を設定している。

博物館教育論の基本的な理論・概念の教授に加え、ワークショップや企画展の記念講演会、美術館学習、藤井達吉の万葉仮名の読み下しなど、具体的な事例を挙げて伝えることを心がけている。これについては、学芸員としての日々の経験が生かしていると考えている。3名の勤務先である碧南市藤井達吉現代美術館では「アートによる学習支援推進事業」としてアートカードを作成し、小中学校における出前授業などで鑑賞教育を行っているが、このアートカードを用いたゲームを学生に実際にやってもらい、教育現場における実践について理解を深めてもらっている。また大学での講義に現地授業を組み合わせ、講義内容の応用などが学べるようにしている。更に浅野・土生が美術の学芸員、豆田が歴史の学芸員であることから、それぞれの専門をもとに幅広い知見を紹介するようにしている。

ビジュアルコミュニケーションと社会の現状と学生個々のニーズを考え、知識・技術・能力を養うためには学生個々とのきめ細やかなコミュニケーションが最重要だと考える。
学生一人ひとりの個性を伸ばすコミュニケーションのあり方を授業毎に考えている。
ビジュアルコミュニケーションの在り方は常に変化していくものであるため、最新のアプリケーションと情報伝達技術に関する研究と対応は怠る事のないよう努めている。
学生にあたっては、特に「考える力」を身につけさせるため、先ずは問いかけること、そして様々なケースを見せる展開を試みた。

授業の最終目標は舞台上で自分達が創った作品を発表することとしている。
そのため、こちらから与える授業スタイルではなく、学生から動きやテーマを引き出せるような実技を用い、ブレインストーミングなどの手法も用いながら創作する過程でつまづきを少なくするような工夫をしている。
また、2人組の活動から徐々に人数を増やし、最終的には8人でグループ創作を行う。
皆が積極的に参加できるように人数の調整も行っている。